

戦争中の能楽

河村 隆司

戦時下の対応

お能はもともと天皇賛美の文句が多く、少し手直すと皇国史観に反しないので、白衣の勇士の慰安会などで盛んにお能を演じました。国のほうも、それを奨励してくれました。そんなこともあって、軍部から押さえつけられたり、憲兵からにらまれることが、案外少なかったわけです。しかし、戦争でみんなの生活が苦しくなったために、お能も盛んには上演できなくなり、だんだん先細りになりました。灯火管制がありますと、電灯もつけにくいことなどもありまして、お能はだんだんとやりにくくなりました。

軍からの抑圧は少なかったのですが、天皇自体を舞台に出す曲は、怖れ多いということで、警察から要請はありませんでしたが、自粛しました。北海道での「蟬丸」の公演の時に、この話は天皇の娘が狂女となり、息子が盲目になって捨てられる、という筋ですが、右翼の攻撃を恐れて中止になったことがありました。この後、結局「蟬丸」は廃曲にされましたが、戦後に復活しました。

文句のほうも変えの文句を出しました。これは「玄象」という曲です。これはもともとは「われ玄象の主たりし。村上天皇」という文句であったものを、戦争中は村上天皇を光源氏に変えています。また「延喜聖代の御穰。村上天皇とは我が事なり。」を、「桐壺の帝の御穰。光源氏の大臣とは我が事なり。」と変えています。このように変更した謡本を発行していました。天皇を登場させては怖れ多いということで、人物を変えたわけです。戦後になって、変えた文句をまた元に戻すために、その上に紙を貼り、直しています。

こういう例はほかにもあります。「采女」という曲もそうです。もともとの文句は、天皇の寵愛を受けていた采女が天皇が心変わりしたため、「およばずながら君を恨みまいらせて、この池に身を投げ空しくなりしなり。」とあったのです。「およばずながら君を恨みまいらせて」をやめて、「深く嘆きてこの池に身を投げ空しくなりしなり。」と変えています。さらに

「御情かたじけなや下として君を恨みし、」というのを「御情かたじけなや下として君を慕ひし、」と文句を変えて、対応していました。

「絵馬」という曲では、「何をか包むべき我等は伊勢の二柱、夫婦と現じ立ちいずる。」というのが元の文句ですが、「何をか包むべき我等は伊勢の二柱に仕へまつれる神ぞかし。」と変えています。伊勢の天照大神が夫婦であられたのではもったいないという理由からです。また、「われは日本秋津島の大統領地神五代の祖天照大神」という文章が入るのですが、戦争中はこういう文句をぬかしていました。

「恋重荷」では、「そもそもこれは白河の院に仕へ奉る臣下なり。」を、「堀川の大臣に仕へまつれる者なり。」と変えています。また、「如何なる折にか。忝くも女御の御姿を拝み申し。」というところの、「女御」を「北の方」に変えて、対応しています。

このように戦争中に変えた文句を、終戦後は、また全部元のように書き直しています。

戦意高揚の新曲

戦争中には戦意高揚のためということで新曲をつくっています。「義経」という曲は、日本放送協会の依頼を受けて作られ、ラジオで放送されています。作詞は高浜虚子です。義経が蒙古に渡ってチンギス・ハンになり、日本の戦意を高揚したという話です。これなどは戦意高揚のいい例ではないかと思えます。

「忠霊」という新曲は、大日本忠霊顕彰会の所望により観世会委員会がつくったものです。「特殊の本説に拠らず、大君の御楯となつて身命を祖国に献げた忠霊を取扱つた曲で、神武天皇御詔勅、明治天皇の御製『国をおもふ道にふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも』『あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな』の二首を始め、故北白川宮永久王殿下の御歌『大神に告げ奉るわが心御国のために命さゝげむ』、大伴家持の『海行かば水漬く屍山行かば草むす屍大君の辺にこそ死なぬかへりみはせじ』の歌及び皇軍諸兵が粉骨碎身して戦っている現下の聖戦は

固より、臣道実践、七生報国、銃後の努力、滅私奉公の精神、大東亜共栄圏の確立の理想などを資材として脚色を加へえたものである。」と解題にあります。「義経」よりも「忠霊」が先にできたと思います。

「鷲」は、日露戦争の時につくられたもので、大鷲をロシア、中国を乙女にして、日本の神々が鷲に食われそうな乙女を助ける、という話です。高木半という右翼がかった方がいまして、はじめ「楠」という別れの曲をつくり、のちにこの「鷲」をつくりました。これは明治につくられたのですけれども、非常にはやりました。日中戦争になった時にもこれは非常に奨励されました。

あちこちで軍人に見せるような能では「義経」「忠霊」などの新曲などがよく上演されました。このような新曲を隠れ蓑にして、古典の曲の文句を変えたりして、演じていました。時代に便乗して、うまく保身を図ったといえます。

若手の戦死

野上弥生子の小説『迷路』に、彦根の井伊直弼や能に関連して、梅若万三郎のことが、数枚だけですが、描写されているところがあります。小説ですからかなり虚構があると思うのですが、野上さんは、実在された梅若万三郎さんをよく知っておられます。何十年とかかって芸ができていくのに、万三郎さんの息子の猶義さんが兵隊に取られるわけですが、その心境が描かれています。

私の一番上の道也兄が能をやっております非常にうまかったので、能楽界から注目を受けていました。しかし召集を受けまして、両親のまえに手をつけて「今までお世話になりました」と言った時、母は「父母の恩を謝すると手をつきてしみじみ云ひぬ門出せまるに」とうたいました。兄は帰ってくるとすぐに着物に着替えまして、はかまを着けまして、一番好きな「江口」を舞いました。私にもとても丁寧に事細かに教えてくれました。それが教えてもらった最後でした。

また、兄がもうそろそろ国内から戦地のビルマへ行くらしいという頃でした。その時にみんなでおうすを飲みまわしました。お菓子は、芋のきんとんの茶巾絞りでした。兄は「小袖曾我」を謡い出しました。兄弟と母親との最後の別れの部分です。父も声をそろえて謡いだそうとするのを、兄が「さっ」と止めました。父はえらいものを歌いだしたなあ、と思っていたらしいのです。兄は「これや限りの親子の契り」と言う歌詞を、とっさに「これやし**ば**しの親子の別れ」と謡い

替えました。なんとも言えない感じがしました。その後、戦地の兄から葉書がきましたが、結局「これや限りの」になってしまいました。

これは不思議な話です。わたしはまだ学校で学徒動員に行っていました。昼間に勉強をしていたら疲れまして、台所で何か食べるものがないかと探していました。そこで母が昼寝していて、突然起きて「何か言ったか。」と言いました。「いや、何も言わない。」と私は答えましたが、でも母は耳元で「かあちゃん。」と三度聞こえたと言うのです。わたしはふっと、ビルマに行っている一番上の兄のことが頭に浮かんで、とても気になったのですけれども、言わなかったのです。「上海に行っている次男の禎二兄か、島根に行っている三番目の晴夫兄かが、淋しくなって呼んだのと違うか。」と、わたしは言いました。そういうと母は「そうかなあ。」と答えました。その時はあえて一番上の兄のことは言わなかったのです。

3か月ほどして、家に帰ってみますと家の様子がおかしい。「仏壇に行つてごらん。」と言われて、行ってみますと一番上の兄の戦死の電報が届いていました。戦死した日は何をしていたかと思って、母の日記をみましたら、そこに「昼寝していたら耳元で『かあちゃん』と三度呼んだ、誰かしら。」と書いてありました。

その日記は今も禎二兄のところにあると思います。当用日誌と書いてあって、表紙に軍艦の絵が描いてあり、日記を書く欄は非常に小さいものだったと思います。母に兄の声が聞こえたのはまさに兄が戦死した日でした。私もそこにいましたし、日記にも書いてありました。こんなこともあるのですね。道也兄は謡曲の100番集だけを持っていきました。

京都の能楽界では、金剛勲さんも戦死だったと思います。今の茂山忠三郎氏の兄さんが良介といいまして、よくできた方でした。この方も戦死だったと思います。この良介さんと茂山千作さんとうちの兄貴などが、このころの若手としては優秀でした。この中では、千作さんだけが生還されました。

戦争ではたくさんの方が死んでいます。原爆でも死んだ方もたくさんいます。豊嶋要之助さんや、豊嶋文一さんなどですが、その人たちはだいたい広島出身です。さきほどの梅若万三郎さんの息子の猶義さんは生きて帰りました。優秀な方が戦争で亡くなって、残念なことです。

戦後のこと

戦後もいろいろと苦勞をしました。そのころは自動車で運ぶには、燃料もありませんので、リヤカーや大八車に装束をのせまして舞台に向かうわけです。その中に刀がありまして巡査に呼び止められたこともありました。中味が竹光なので釈放されましたが。進駐軍のほうからはあまりクレームもなかったのです。もっとも刀なんかを使う演目に対しては文句はでました

が、なんとか話をつけることができたようです。能楽が占領下でも上演できたのは、白洲正子さんの旦那の白洲次郎さんがGHQと親しかったので、そこからお話があったためかもしれません。

（談 観世流能楽師・重要無形文化財保持者）

（2000年9月28日、於河村隆司宅）